第３章　下野市の歴史文化の特性

１．下野市の歴史文化

（１）自然の特性

１）概　要

第 2 章でもふれたが、市の西部に姿川、思川が南流し、東部には田川、鬼怒川が同様に南流している。市全域の地形を見ても南に向かって緩やかに傾斜する地形で、南北に伸びる台地は縁辺に段丘面が形成される。また、樹枝状に小支谷が入り組むことから、僅かではあるが東西方向に高低差がある地形となる。しかし上り下りが難しい程の差ではないため移動が苦になるような地形ではない。

1940 年代にＧＨＱにより撮影された写真で確認できる河川の状況と比較すると 1960～70 年代に行われた河川改修によって、田川も姿川も護岸工事が進み直線に改修されていることがわかる。また、これらの写真の台地上にはかなりの広範囲にわたり、北関東特有の雑木林が広がっていたことが見て取れる。この雑木林の多くは、アカマツ、クリ、コナラ、クヌギを中心とした二次林と想定される。これらの樹種は、薪や炭などの燃料として、落ち葉は堆肥として利用されてきた。これらの堆肥は、稲作はもとより、当地の特産物である干瓢となる夕顔の作付けにも無くてはならない肥料であった。また、本市の気候の特徴は、関東特有の夏季高温、6～9 月にかけて降水量が多い点、日中の強い日差しと夕刻の雷雨であり、江戸時代から夕顔生産に適した土地柄であることから現在でも国内第一位の生産量を誇っている。

２）自然景観から人工的な景観へ

上記したように、河岸段丘下の低地、小支谷、台地上に広がる雑木林と畑地の間に集落が点在する景観が近代まで存在していたことは、近世に描かれた『日光道中分限延絵図』や南河内町史絵図編に収録された絵図などから想定することができる。この景観は、弥生時代後期から小支谷を利用して始まった小規模な水田耕作以降、近世までほとんど変化していない景観であったと考えられる。

しかし、古墳時代から少しずつ景観が変化したと考えられる。それは、金属の刃先を持つ農工具の発達により平地林は切り開かれ、河川には堰などが造られ畑地や生産性を高くするために水田が大きくなり、用水路などが整備されたと推測されるためである。また、豊富な蓄えから中央と結びついた豪族は大きな墳墓を築造し、人工的な小高い丘が幾つも造られ、それまでに無かった景観が生まれた。当地域の大規模な古墳は、当地特有の地質である関東ローム層や鹿沼軽石層を掘り込んで周溝を形成していることから、完成した墳丘は、黄褐色の高塚であったと想定される。

古代には東山道が整備され、下野薬師寺、下野国分寺・下野国分尼寺が建立された。このように古代下野国の政治と文化の中心地として繁栄したことから多くの集落が形成され、古代でありながら他地域と比較すると豊かな暮らしが営まれたと考えられる。特に下野薬師寺や下野国分寺跡周辺には門前市のような物資の流通とそれに伴う集住地帯が形成された。平安時代末期の嘉承 3 年/天仁元年（1108）には、上野国の浅間山の大噴火と地震等の災害により、北関東地域はそれまでの景観を一変させる災害にも見舞われているが、発掘調査の成果などから当地は比較的被害の少なかった地域と考えられている。

中世には、小山氏・宇都宮氏などの豪族による勢力争いの中、児山城、薬師寺城、箕輪城が築城された。旧来の集落景観は変化を余儀なくされ、城館の経営に基盤をなすため、勢力に応じた変遷を遂げたと考えられる。城館を築くため比較的大規模な地形の開削などがあり、古代までの景観を一変させた地域もあったと考えられる。

近世以降は、日光道中、関宿道、壬生通などの主要街道が整備され、小金井、石橋などの宿場や街道沿いに薬師寺の集落が整備された。それまでの農村的景観から都市型の宿場景観への変容があったことが予想される。この頃、国史跡である小金井一里塚や市のブランドにも認定されている祇園原の松林などの人工的な植林が行われた。また、現在の花見ヶ岡周辺を通っている日光道中壬生通りにも、日光杉並木同様の並木が形成された。1940 年代に撮影された航空写真には、約 80 本の杉並木が写されている。

近代には、近世の道路網を奥州街道などとして再整備が進められた。旧来から宿場である小金井宿と石橋宿には、東京と東北を結ぶ鉄道網が整備されたことにより停車場がつくられ、人や物資の大量流通に併せて町として新たな再生が起きた。1960 年代以降のモータリゼーションの発達により、首都圏と東北あるいは日光などの観光に付随して、国道 4 号沿いの祇園原周辺には複数のドライブインが営まれた。しかし、1980 年代に東北縦貫自動車道の整備の進捗にあわせるように、これらの景観は変化していった。東北新幹線の開通により首都圏まで通勤・通学圏内となったことや、宇都宮市・小山市といった都市と隣接することから小金井・石橋駅周辺のベッドタウン化が進んだ。さらに、市内数か所で同時に工業団地が整備され、旧来型の農村としての景観は大きく変化した。さらに 70 年代後半には、自治医科大学及び附属病院が設置されたことにより、昭和 58 年（1983）には自治医大駅が新設され、それまで雑木林と畑地であった地域は、住宅・都市整備公団によりニュータウン「グリーンタウンしもつけ」として開発が行われ、新たな住民を迎え活気ある街が形成され現在に至っている。

このような変容を遂げた本市の景観であるが、現在でも姿川や田川周辺、下野薬師寺跡、下野国分寺跡などの史跡周辺と三王山地区、児山城周辺は古代からの景観が保存されており、日光連山や那須連山、筑波山系、冬季の夕刻には遠くに赤富士を水田や畑地、平地林とともに見ることができる。これらの景観は史跡を取り巻く周辺環境として今後も保護すべき景観と考える。

（２）歴史の特性

１）概　要

■原始～古代

下野市が位置する栃木県中南部一帯は、数多くの遺跡が存在する遺跡密集地域である。特に、弥生時代後期には、三王山地区、姿川周辺地区で集落が形成されていることが確認されており、そこからは北関東各地や南関東に系譜を持つ土器が出土していることから、他地域との交流が頻繁にあったことを裏付けている。

壬生町から小山市の北部にかけての思川左岸の段丘上と、鬼怒川と田川に挟まれた丘陵部である三王山地区には、古墳時代の前期から中期、後期から終末期にかけての古墳群が形成されている。

その後、下野薬師寺、下野国分寺、下野国分尼寺が造営された 7 世紀から 9 世紀代は、遺跡の数が多いのみでなく官衙、寺院、官道（東山道）など下野国を代表する遺跡が点在し、それぞれの遺跡が瓦・須恵器生産地、集落などと相互にどのように関連していたかを探ることができるという点でも重要である。

■中世

中世には当地を通過するように鎌倉街道が整備され、発掘調査でもその痕跡が確認されている。また、宇都宮氏と小山氏の勢力範囲の境界に相当したことから、児山城とそれを支える支城的な城館が複数築城された。結城・下館方面の常陸勢に幾度も攻略され、当地の支配勢力が頻繁に交代しており、複雑であったことも判明している。

■近世

江戸時代以降は、五街道のひとつである日光街道のほか関宿通多功道が整備され、交通の要衝として発展したほか、将軍家の日光社参の際に御休息所が設けられた。さらに石橋宿、小金井宿が宿場として発展し、小金井宿では句会・俳諧が開かれていたことを示す史料が残されている。また、小山市喜沢で西に分岐し思川を渡り、北上し飯塚地区から下野国分寺跡の西側を通過して花見ヶ岡から壬生方面を通過し日光に至る壬生通りが整備された。

■近現代

明治以後は、明治 18 年（1885）7 月に上野から宇都宮間の鉄道（東北本線）が開通し、石橋駅が開業した。その後、明治 26 年（1893）3 月には、小金井駅も開業となり、江戸時代の石橋宿、小金井宿は、鉄道沿線の交通・物流拠点として宿から近代の町へと発展した。

第二次世界大戦後には自動車輸送が交通・流通の主力となったが、東北本線に平行して走る国道 4 号線に加えて、高速道路（東北自動車道、北関東自動車道）のインターチェンジがアクセスしやすい場所に建設されたことから、自動車交通の利便性も高い地域となった。昭和 47 年（1972）には自治医科大学が開学し、さらに昭和 58 年（1983）には国鉄（当時）自治医大駅が開業した。

２）時代別特徴

①旧石器から弥生時代（約 12,000 年前～3 世紀頃）

自治医科大学周辺地区の開発に伴う調査で、後期旧石器時代の石器を製作した痕跡が確認されている。下野国分寺跡周辺でも後期旧石器時代の黒曜石製のナイフ形石器などが出土している。

また、南河内中学校北側の丘の上で、縄文時代草創期に定住を始めた痕跡が確認されており、この時期から既に当地域に人々が集住していたことがわかる。下野国分寺跡周辺では、旧石器時代の遺物と共に、縄文時代後期の土器類も出土しており、この地域周辺でも、縄文時代の早い段階から定住生活を営むようなムラが出現したと推定される。本市域北端部で宇都宮市と接する地域では縄文時代後期の土偶が出土しており、この頃から集落が形成されたと考えられる。また、市南東部の西原南遺跡では、縄文時代後期の称名寺式土器が出土した柄鏡形の竪穴住居跡が確認されており、この地点から南東方向約 3 キロメートルに位置する国指定史跡寺野東遺跡（小山市）へと続く遺跡群が広がっていると考えられる。このほか、新庁舎の建設に伴う発掘調査では、縄文時代の早期から前期頃の陥穴が列状に複数基確認されており、自治医科大駅東側の開発区域でも同時期の遺構が複数確認されている。

栃木県南部全域を概観しても弥生時代の遺跡はあまり多くない。その中で、宇都宮市南部から本市にかけては比較的多くの弥生時代後期の集落跡が発見されている。特に三王山地区では 20 軒を超える弥生時代後期の竪穴住居跡が確認されており、それらの遺構からは、地元で生産された土器以外に茨城県、埼玉県、群馬県、南関東地方の特徴が見られる土器が混在して出土している。また、隣接する朝日観音遺跡からは、北関東地域でも類例のない鉄剣（全長約 30 センチメートル）が竪穴住居跡から出土している。このように、三王山地区からは栃木県の弥生時代を考える上で非常に重要な遺跡が発見されている。

また、現在調査中のため、詳細は本報告での検討となるが、国分寺地区の箕輪城周辺でも三王山地区と同時期と想定される弥生時代後期の集落跡が確認されており、弥生時代後期の他地域の土器とともに古墳時代前期の土器がまとまって出土している。

このほか、両地域の中間地域となる自治医大駅東側の開発区域でも弥生時代の遺構が確認されているが、散漫な状況で確認されており、三王山地区のように複数の竪穴住居跡が同時に存在するような居住形態は形成されていなかったと想定されている。

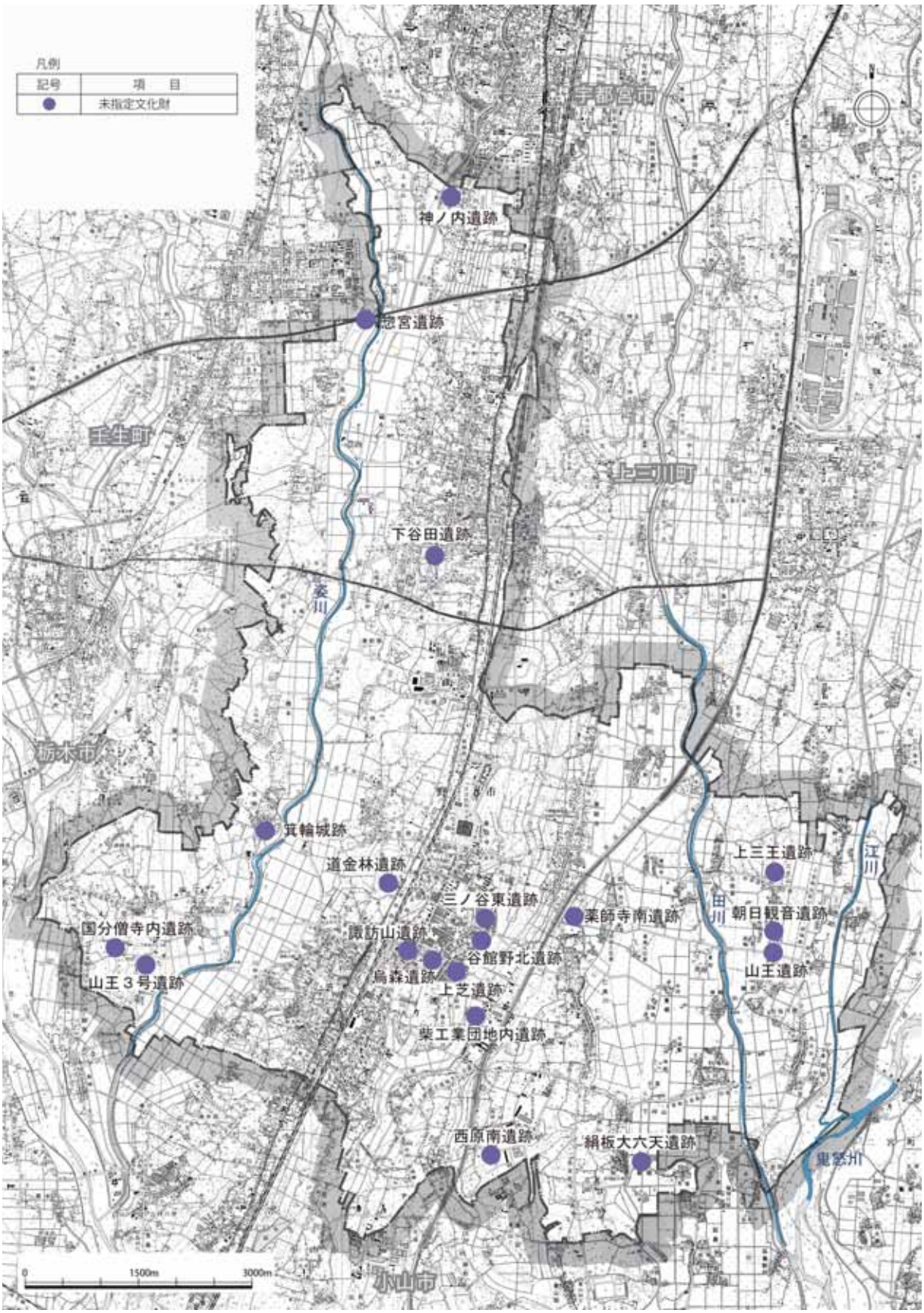

図 12　下野市の旧石器～弥生時代の遺跡

②古墳時代（4～7 世紀前半）

三王山地区では、4 世紀前半に弥生時代後期のムラの跡を覆うように、古墳時代前期の方墳や前方後方墳が築造される。特にこの中で三王山南塚 2 号墳からは、東海地方が初源とされる形式の土器類が出土しており、その遺物の年代から北関東地方でも最古級の古墳と想定されている。

古墳時代前期には石橋地区の西部で姿川を西に見下ろす台地の縁辺に文殊山古墳（方墳か）が築造される。ここからは三角縁神獣鏡に類する銅鏡の破片が出土しており、当時の中央王権と密接な関係下にあったことが想定されている。また、三王山地区の朝日観音遺跡でも 1 辺 20 メートル級の小型の方墳から小型仿製鏡が出土している。

5 世紀末から 6 世紀になると、市西部を流れる姿川と思川（市域南西側に隣接する小山市、栃木市東部、壬生町南東部を流れる）に挟まれた地域に首長墓の造営が移り、思川と姿川の合流点付近に、摩利支天塚古墳（小山市　国史跡）→琵琶塚古墳（小山市　国史跡）→吾妻古墳（栃木市・壬生町　国史跡）と墳長 120 メートルを超える前方後円墳が築造された。

6 世紀中葉以降、思川、姿川、田川流域に多数の古墳が造られる。本市では東部の田川流域で、三王山地区とその周辺及び下野薬師寺が後に建立される台地上に複数の古墳が築造される。三王山地区では全長 80 メートル級の前方後円墳の三王山古墳が築造されており、この地域の首長層の墓と想定される。また、ここから南に位置する別処山古墳からは、墳丘の規模と相反する銀装大刀、三鈴鏡などが出土している。後に南側に下野薬師寺跡が建立される位置には御鷲山古墳が築造されている。この古墳も全長 80 メートル級の前方後円墳で、凝灰岩を巧みに利用した複室構造の長大な石室が造られており、現在もこの石室には入ることができる。この周縁には小規模な墳丘の群集墳が 50 基ほど存在していたことが、昭和 20 年代に米軍により撮影された航空写真に記録されている。

西部の姿川流域では、石橋地区に全長 80 メートル級の前方後円墳で、巨大な凝灰岩の板石を使用した石室と墳丘に多数の埴輪群をもつ横塚古墳、JR 東北本線と東北新幹線の工事により消失した下石橋愛宕塚古墳が築かれた。下石橋愛宕塚古墳は全長 80 メートル級の帆立貝形前方後円墳で、「下野型古墳」と呼称される墳丘第 1 段が平坦で広い構造の古墳である。複数の巨大な凝灰岩を使用して複室構造の石室を構築している。金銅製の馬具類とともに墳丘上に埴輪に替わって並べられたと想定される須恵器甕類の破片が多数出土している。また、細谷地区の星宮神社古墳からは青銅製の馬鐸や鉄製の鉾などが出土している。

また、下野国分寺跡周辺でも、県史跡国分寺愛宕塚古墳、同史跡丸塚古墳、市史跡オトカ塚古墳、山王塚古墳、甲塚古墳など多くの重要な古墳が残されており、この時期、当地域が有力な豪族の支配地であったことがこれらのことから想定されている。

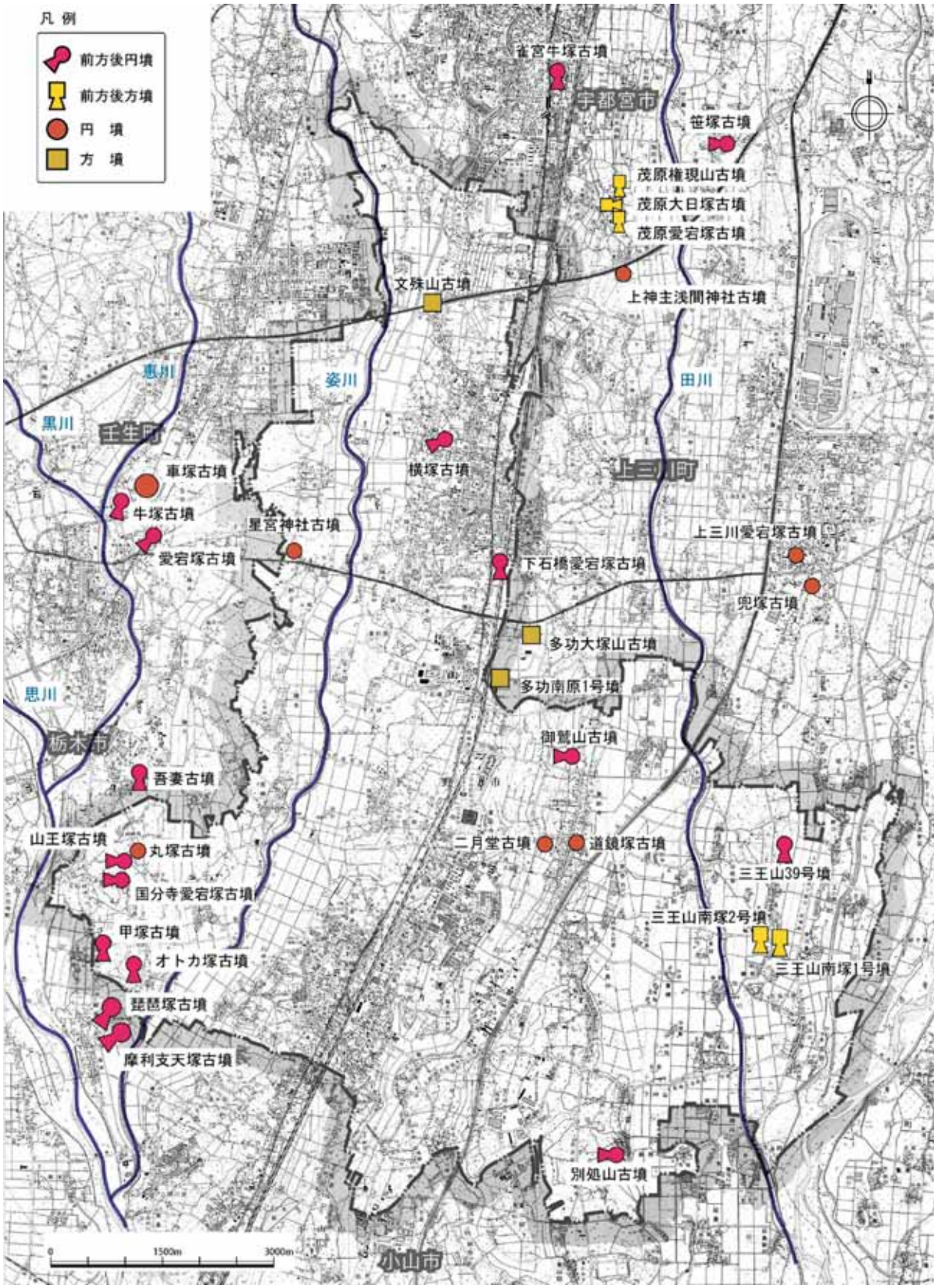

図 13　下野市周辺の主な古墳

③奈良・平安時代（8～11 世紀）

律令期になると全国に七道が整備されるが、その中で当地には東山道が敷設され、沿線には国の機関として官衙、寺院等の重要施設が設置された。特に本市域の一部（旧南河内町域）は旧河内郡域で下野薬師寺が建立されるなど 7 世紀代から重要な地域であった。この地域には多数の集落の他に、官衙（推定初期評衙の西下谷田遺跡、推定河内郡衙跡の国史跡上神主・茂原官衙遺跡、多功遺跡）、下野薬師寺跡など律令支配に係る公的な施設の遺跡も多く発見されている。

県内を概観すると 8 世紀前半に下野国庁（栃木市 国史跡）が置かれ、下野国の行政的・政治的な中心地として位置付けられた。これに先立つ 7 世紀後半頃には、下毛野一族の本貫地として下野薬師寺が建立されたと推定される。8 世紀中頃には、聖武天皇による国分寺建立の詔（741 年）を受けて下野国分寺・下野国分尼寺の造営が着手された。天平 5 年（733）に平城京右京三条三坊に本籍を有する戸主於伊美吉子首（へぬしうえのいみきこおびと）が「下野薬師寺造司工」として下野薬師寺に赴任しており、この頃、下毛野氏の氏寺から国の施策としての官寺へと改修されたと考えられている。天平勝宝 5 年（753）に鑑真が来朝し、翌年の天平勝宝 6 年（754）には東大寺の大仏殿前で聖武上皇以下 400 人の僧侶が受戒し、この後戒壇院が設置された。天平宝字 5 年（761）に淳仁天皇の命により、東国の諸国は下野薬師寺を、西海道諸国は筑紫観世音寺（現：福岡県）を戒壇とすることが決められ、東国の優秀な人材は当地で僧侶の資格を受けるために研鑽を積んだ。下野薬師寺には、天平勝宝 6 年に薬師寺僧行信が、後の宝亀元年（770）には弓削道鏡が配流されて 2 年後の宝亀 3 年（772）に当地で亡くなっている。

また、新治廃寺跡・結城廃寺跡からは、下野薬師寺系の瓦が数多く出土しており、寺院や官衙の造営に関わるネットワークが国を超えて存在していたことがうかがえる。こうした官衙や寺院の建設に関連する技術交流を示すものに、瓦の生産を行った瓦窯跡があげられる。栃木県内で確認された古代瓦窯跡は、那須郡荒神平瓦窯（那珂川町）、芳賀郡西山瓦窯（益子町）、安蘇・都賀郡三毳山麓古窯跡群（栃木市）、河内郡水道山・大塚瓦窯（宇都宮市）、寒川郡乙女不動原瓦窯跡（小山市）、梁田・足利郡岡窯（足利市）などがある。

水道山瓦窯跡では、下野薬師寺、下野国分寺・下野国分尼寺、上神主・茂原官衙などに供給した瓦が、乙女不動原瓦窯跡では下野薬師寺に供給した瓦類を焼成していることが調査により確認されている。こうした郡衙や国府、官寺の建設にあたっては、中央からの指示の他、地方豪族が深く関与したと考えられる。それらを示唆する資料として、上神主・茂原官衙遺跡の瓦倉跡からは人名を記した瓦が数多く出土している。これらの人名文字瓦をめぐる問題については、①知識説、②雑徭説、③福田思想による動員、④知識的体裁をとった雑徭徴発など多岐にわたる説が述べられている。また、宇都宮市以南から本市域にかけての同時代の遺構からは、多数の新羅系土器や畿内産土師器等が出土している。古墳の築造以降、寺院・官衙等の公的施設の建設は最新の技術を保持した渡来氏族や畿内の技術保持者により造営・経営されたものと推測される。下野薬師寺跡のガイダンス施設として史跡に隣接して建てられた下野薬師寺歴史館建設に伴う発掘調査でも、この時期の竪穴建物跡が約 120 軒調査され、新羅系土器のほか、畿内産土師器などが出土した。これらの

遺構は下野薬師寺建立と８世紀前半の大改修に関連するものと想定されている。

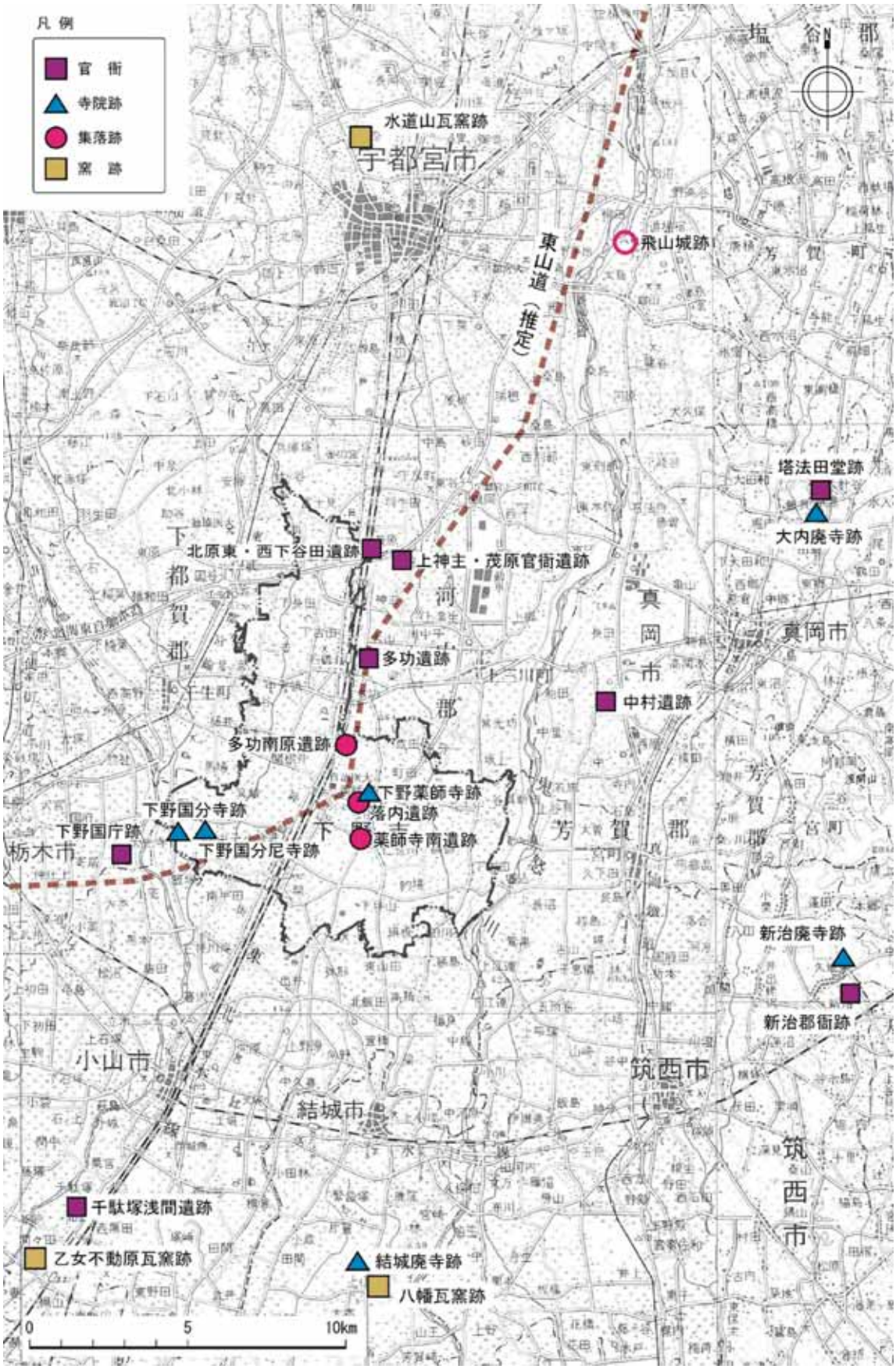

図 14　下野市周辺の主な官衙と寺院跡

④鎌倉時代から戦国時代（12～16 世紀）

鎌倉時代から戦国時代には、宇都宮氏と小山氏の勢力範囲の境界であったことから、各地に城館が築かれた。そしてこの時代には鎌倉街道が整備され、また、鎌倉街道に関連すると想定されている下古館遺跡の発掘調査により、小山と宇都宮を結ぶ「うしみち」が当地を通り、宿と推定される場所が存在していたことが明らかになった。

南河内地域では、中世以降、小山氏一族の支族である薬師寺氏が薬師寺城を築くが、薬師寺氏の動静は 15 世紀後半以降になると不明となる。この後、結城と宇都宮を結ぶ多功道が整備された頃になると、街道沿いに城館がつくられる。

石橋地域では、宇都宮氏の南方の拠点となる多功城の支城として、宇都宮一族の児山氏が児山城を築城する。また、その周囲には複数の小規模の館を配置して防衛ラインを構築した。現在でも土塁と堀の跡が一部残存している箇所や、既に遺構は消失しているが「郭内」など館跡の関連性を示唆する地名が残されている。最終的にこの城は、宇都宮氏が改易となる慶長年間まで存続したとされている。

国分寺地域では、鎌倉初期の小山朝政譲状に「国分寺敷地」と表記されており、この時期に下野国分寺跡・下野国分尼寺跡の一帯が小山氏一族の支配下に置かれていたことがわかる。当時は全国的に律令体制の崩壊期であるが、小山氏は下野国庁の在庁官人であり、国府域や当地域も小山氏の支配領域であったことがここからわかる。また、記録がないため詳細は不明であるが、中世後期以降に箕輪城が築城される。東側に姿川を配置した城の構えとなることから、東方の敵に備えた城の構造であり、宇都宮方か結城・久下田・下館方からの攻撃に対峙する城であった可能性が想定される。

中世の遺跡として、城郭の他にも重要な遺跡が発見されている。自治医科大学周辺地区の開発の際に発見された下古館遺跡は、東西約 480 メートル・南北約 160 メートル・幅約 4 メートルの薬研堀に囲まれた中央を「うしみち」と称された小山と宇都宮を結ぶ街道が通り、宗教施設、祭祀施設、火葬墓、掘立柱建物、方形竪穴遺構等が、堀によって区切られた区画内に配置されていた。中世の宿・市または八坂神社や寺院の門前市の跡と推定され、中世の都市構造を示す貴重な遺跡として評価されている。

このほか、南河内地区には鎌倉初期の供養塔として東根供養塔が残されている。この凝灰岩製の石造物は、当地を支配した佐伯氏が、亡き父母の追善供養のために造立した塔で、石造を製作に関わった工人名から渡来系氏族が関わっていたことが判明している。

また、昭和 50 年代に大規模工場の社宅用地として開発されたため既に消失しているが、昭和 20 年代に撮影された米軍の航空写真には、ほぼ一町四方の堀を二重に巡らす方形居館が石橋の大光寺地区で確認されている。その規模と構造は写真からの判断となるが、現在国史跡とされる足利市の鑁阿寺跡に匹敵する遺跡であった。

なお、下野薬師寺は室町時代に、足利尊氏・直義が全国に安国寺利生塔を建てるという意向を受け入れ、暦応 2 年（1339）に「安国寺」と改名したが、一般には近世になっても薬師寺と呼称されていた。

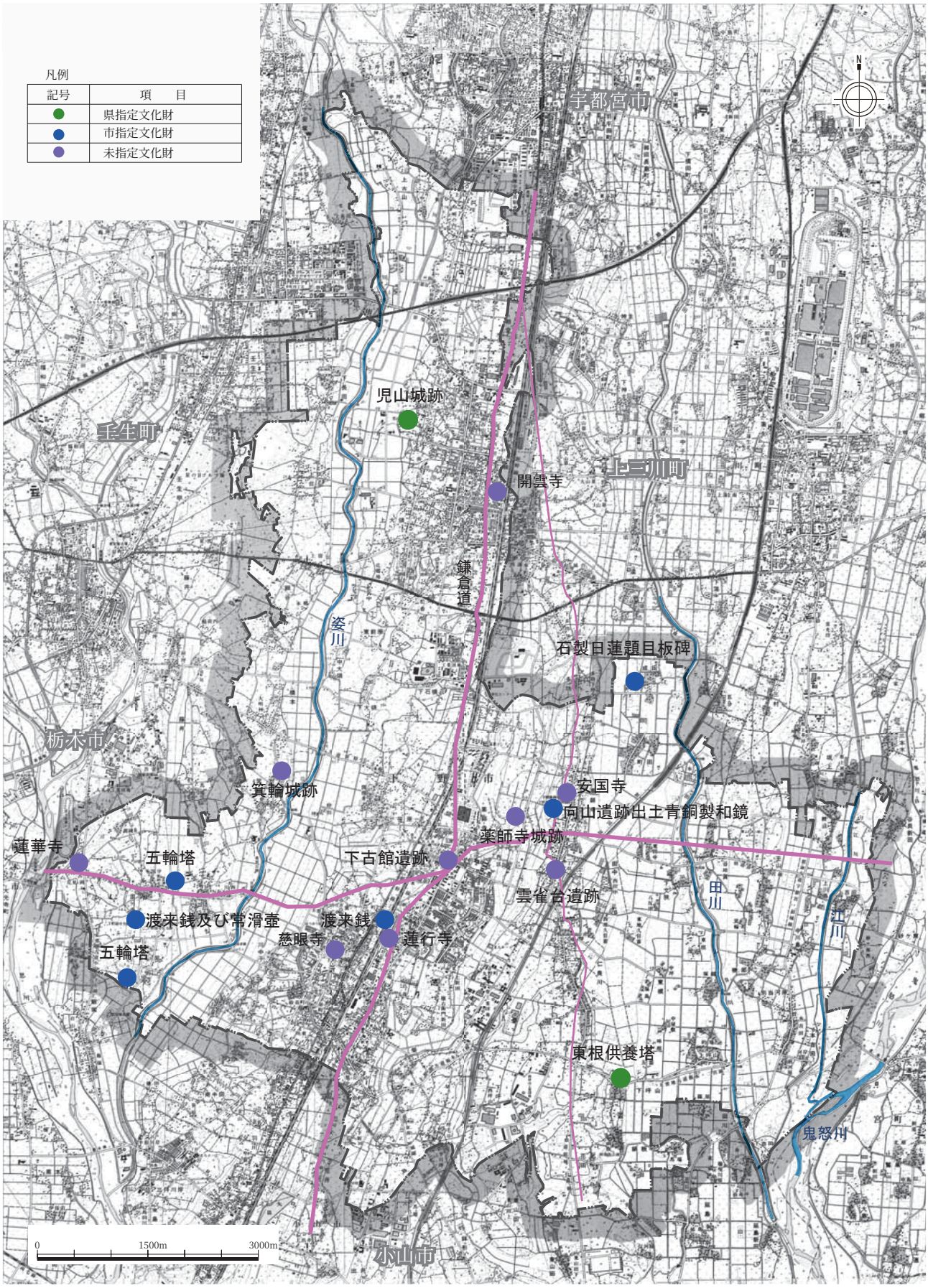

図 15　中世文化財分布図

④江戸時代（17～19 世紀）

江戸時代には五街道の 1 つである日光街道と、その脇往還である関宿通多功道（日光東往還）、日光道中壬生通り（日光西街道）が現在の本市域内を通っていた。五街道（東海道、中山道、日光街道、奥州街道、甲州街道）は江戸時代に徳川幕府の政策として整備された。日光街道敷設の目的は歴代徳川将軍の日光東照宮参詣であるが、江戸から下野国を経て奥州方面に至る物流の動脈路線としての機能も有していた。これらの街道は将軍や大名をはじめ多くの人々の往来があり、特に将軍の参詣の際には 10 万人を超える大行列が繰り広げられた。

日光街道沿いの石橋宿と小金井宿は、こうした街道の人・物の盛んな往来を背景に発展した。馬産地である東北地方と関東地方の中間的な場所に位置することから、石橋宿では鉄道が開通する明治 18 年（1885）頃まで「馬市」が開かれていたことが僅かに残された資料に記されている。小金井宿には、将軍の東照宮参詣の際に休息所となった慈眼寺があり、近隣集落から助郷が集まる活気のある宿場であったことが記録されている。慈眼寺には、宿場の男衆が句会を開催していた句碑が残っており、文化レベルが高かったことも判明している。

また、日光街道の整備に伴い、江戸日本橋から 22 里（約 88 キロメートル）の地点に小金井一里塚が設置された。小金井一里塚は明治以後に日光街道が国道 4 号線となった後も存続し、全国的にも 2 基の塚が現存する一里塚は貴重であることから、大正 11 年（1922）に国指定史跡となった。

南河内地域には宿場は存在しなかったが、関宿通多功道が通り、文化 2 年（1805）の「木曽名所図会」や文化 3 年（1806）の「五街道分間延絵図及び見取絵図－関宿通多功道絵図」には、当時の下野薬師寺（安国寺）周辺の様子が描かれている。これらの絵図から、下野薬師寺（安国寺）周辺は小規模ながら門前町のような佇まいであったことがうかがえる。寛政年間（1789～1801）以降に、秋田藩の陣屋が置かれた仁良川や、吉田河岸に隣接した吉田村も、わずかながらも町並みらしい景観をもった集落であった。

このように人・物が往来する街道の後背地として広がる農村では、江戸時代後期より干瓢、養蚕等の商品作物の生産が盛んになっていった。また、江戸時代中期以降、農家の副業として結城紬が盛んに生産されるようになった。

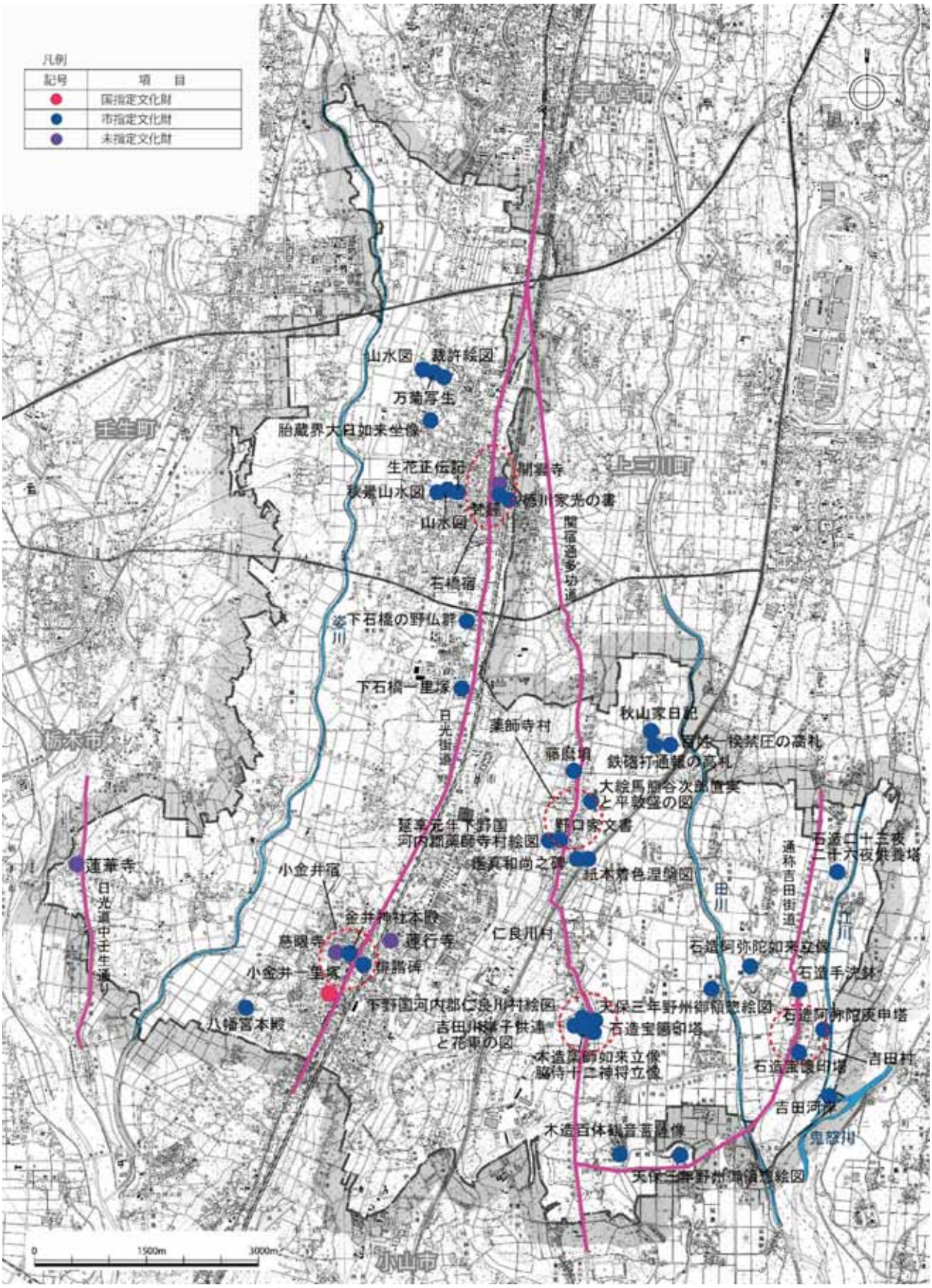

図 16　近世文化財分布図

⑤明治時代以降（20～21 世紀）

明治維新後、現在の本市域は廃藩置県により日光県に属したが、明治 6 年（1873）に栃木県に編入された。この時、現在の開雲寺敷地内に知県事役所が置かれた。明治 22 年(1889)の町村制施行後には、村々の合併により吉田村、薬師寺村（南河内地域）、姿村、石橋町（石橋地域）、国分寺村（国分寺地域）が成立し、これが第二次世界大戦後にさらに合併して南河内町、石橋町、国分寺町となり、平成 18 年の合併で下野市となった。

明治以後も本市域は、鉄道の開通と石橋駅（明治 18 年・1885）、小金井駅（明治 26 年・1893）の開業により栃木県内の交通要衝地として発展した。また、江戸時代から生産が始まった干瓢、結城紬、養蚕の生産が盛んになり、地域経済の発展に多大な貢献を果たした。

江戸時代には近畿地方が中心であった干瓢栽培は、明治以降に栃木県で拡大・一般化し、昭和期には全国の生産量の約 9 割を栃木県産が占めるようになった。中でも、本市域、壬生町、上三川町、真岡市等、県南部から県央部にかけてが主産地であった。

生産量の増大と共に、干瓢生産の技術も変革していった。中でも、大きく進歩したのが干瓢の元となるふくべの果実を剥く干瓢剥きの技術であった。明治 20 年頃までは、輪切りにしたふくべの実の内側から「手かんな」を当てて左手で押さえ、右手でふくべを回転させて剥く方法が一般的であった。明治 20 年代に木製の台に回転軸を取り付け、これに輪切りにしたふくべの実を取り付けてハンドルを手で回し、かんなを付けた腕木を押さえながら表面から剥いていく輪切り用手回し機が考案され、さらにふくべを輪切りにせず、丸のままむくことのできる丸むき用手回し機へと改良された。これらの機器の登場により、手かんなの十数倍の能率で干瓢を生産することが可能となった。この頃開通した鉄道による輸送力の強化も、干瓢の生産増加を後押しした。昭和 10 年（1935）前後からは、丸むき用手回し機を足踏み式に改良した足踏み式丸むき機が出回るようになった。これにより、作業の姿勢も従来の座り作業から腰掛け式へと変わり、作業効率も手回し機の 1.5 倍に向上した。昭和 30 年代（1955～1965）以降は、足踏み式に変わって、動力にモーターが利用されるようになった。

生産された干瓢は農家から仲買人の手を経て、生産地問屋→大阪問屋→消費地問屋という流れで取引された。石橋や小金井には生産地問屋が軒を並べ、大阪の問屋の支店も存在した。

干瓢と並んで江戸時代から農家の現金収入を支えたのは養蚕と結城紬の生産であった。結城紬は明治時代に入ると、紬の需要が増えたことからその生産に拍車がかかった。紬生産は真綿からの糸とり、糸を染める紺屋、機織りを行う機屋と大きく三つに分かれるが、このうち専業は紺屋だけで、それ以外の仕事は農家の副業であった。紬生産は結城に近い南河内地域で盛んであった。特に吉田地区には機屋が多く農家の婦女子の多くが紬織を行っていた。これに対して薬師寺地区では糸とりを行う者が多かった。

昭和 30 年代からバブルが崩壊する平成 2 年頃まで、紬の柄がそれまでの単純な絣（かすり）から複雑な亀甲絣が主流となったことから、結城紬の生産は農家の副業ではなく専門化が進んだ。昭和 31 年（1956）に紬の製作技術が国の重要無形文化財に指定されてからは、伝統工芸品としての付加価値もつき、高級織物として取引されるようになった。平成 22 年（2010）に

はユネスコ無形文化遺産に登録されている。

このような結城紬をはじめとする布の生産については、甲塚古墳から出土した機織形埴輪により、古くは6世紀後半頃に当地で機械を使った布生産が行われていたことが実証されている。また、奈良時代の下野国分寺跡や周辺の官衙遺跡で出土する瓦の中に「若麻部」や「大麻績」などの氏族を表す文字瓦があり、当地で律令時代以前から布生産に係る部民が存在していたことが理解できる。このほか、古墳時代から奈良・平安時代にかけての竪穴住居跡からは、鉄製・石製の紡錘車が他地域と比較して多く出土している。最近の研究では、郷や里とされる村の中で生産された糸が郡衙に集められ、郡衙や国府で布生産が行われていたと考えられている。

律令体制崩壊後の中世段階では、布生産に関する資料が無いため、一時断絶の可能性が想定されるが、近世以降隣接する現在の真岡市域で、特産物として木綿が生産され、鬼怒川の水運により江戸へ運ばれた。結城紬もほぼ同時期に量産が始まり江戸期から戦前まで当地域周辺の特産品として生産が続けられた。

①手かんな

②輪切り用手回し機

③丸むき用手回し機（上）
④足踏み式丸むき機（右）

図 17　干瓢の皮むき作業の変遷
①→②→③→④

（３）民俗文化の特性

１）講と共同行事

かつて本市域では様々な講が盛んで、昭和 30 年代頃まで各所で行われていた。旧南河内町で昭和 61 年（1986）に行われた講の実施状況調査によれば、次 54 ページ表のような講が行われていた。このうち最も盛んに行われていたのは十九夜講と庚申講であり、他の講はそれぞれ数か所で行われるのみとなっていた。国分寺町史民俗編では、十九夜講、庚申講、念仏講の記載がされているが、その他の講は記載されていない。また、戦前まで盛んだった講として、学問の神様である天神様を祀る子ども達のための講である「天神講」や、月待信仰の二十三夜講がある。現在は十九夜講が幾つかの地区で継続しているのみであるが、講に関係する石造物は十九夜塔、二十三夜塔、庚申塔を中心に市内に多く残存している。

集落の人々が集まって行う会食は、祭りや祈願等の共同行事でも盛んに行われた。これらの中には、海の無い当地で行われるにも関わらず、海の幸であるカツオ（国分薬師堂のカツクレ）やサンマ（国分寺紫の暁祭り）を供える行事や、組内あるいは講の中の特定の家が宿になり、そこで調理したものを組内または講中の人々が御馳走になる（南河内谷地賀のナベカケズ）等のユニークな行事も存在する。

２）祭りと民俗芸能

祭りは八坂神社（天王様）の夏祭りが現在も小金井、柴北、吉田、薬師寺、石橋等、市内各地で行われている。また、かつては、大杉神社の祭りである大杉様祭りが、国分や仁良川で盛んであった。祭りの時に演奏されるお囃子（大杉囃子）は、市内のお囃子会によって伝承されている。

また、民俗芸能では、栃木県下に最も多く分布する太々神楽が、橋本神社、下古山星宮神社、仁良川の愛宕神社、薬師寺八幡宮で元旦や祭礼に奉納されている。これらのうち、橋本神社と下古山星宮神社の太々神楽は市の無形文化財に指定されている。

３）民間信仰・風習

昭和 30 年頃までは、様々な民間信仰や風習が存在し、特に生活を支えた干瓢生産と結城紬に関連する伝説・風習は数が多かった。現在はその多くが失われているが、星宮信仰は現代まで残る信仰の 1 つである。当地域には星宮神社が多く祀られており、諸説あるが関連する神社も含めその数は 20 社近くあると考えられる。このような分布は限定的な地域を示しており、非常に特徴的である。

■干瓢の生産に関連する信仰・風習

ア．板倉と樋口の雷電さま

田畑に祈雨の祭神として、群馬県邑楽郡板倉町雷電神社、茨城県下館市（現筑西市）樋口靂神社に参拝雹害除けのお札を受けてくる雷神信仰

薬師寺雷電神社、本吉田八幡宮境内の雷電神社、谷地賀、磯部などで祀られている。

イ．「ハデガエシ」

干瓢を干すために庭先に置いた「ハデ」を片付け、干瓢の作業が終わったことをお祝いする「ハデガエシ」を行う。

■結城紬の生産に関連する信仰・風習

ア．蚕影神社　　茨城県つくば市神郡　蚕影神社への参拝

機神様　東根の例、地機の前方柱に機神様を祀る。正月にはお供え餅をあげる。

谷地賀の例　養蚕の神様＝サンズノカミ＝サンザノカミ（蚕座の神）を歳神様と一緒に祀る。

イ．機神講

・西田中の例、１月中に結城紬の生産に関係する女性が集まりお日待をする。

・吉田地区　上本吉田の紺屋老沼家　下本吉田の紺屋上野家が中心になり、機神様を祀る。

・茨城県常陸太田市幡町の長幡部神社へ参拝。足利織姫神社への参拝

・的場地区　機神様の信仰、例年１月 24 日に女性が観音堂に集まり、応神天皇と機織りの図柄二幅の掛け軸をかけ祈願

ウ．機織の俗信・風習

・糸をとる薬師寺地区と織る吉田地区　仁良川は薬師寺地区だが、結城街道沿いだったため機屋が多く、最盛期に 100 軒近くの機屋があった。

「嫁をとるなら機場からとれ」との習わし

・節分の晩には、豆撒き後に地機の上に菅笠を被せた。「機に年を取らせない」ため。現在は麦藁帽子を被せる。

・初午には「糸機の仕事をすると火元にたたる」⇒　火事になる。

・繭玉　年頭に当たってその一年の作物の豊作をあらかじめ祈念して祝う予祝行事。これを繭玉と称するのは餅花の習俗が養蚕の生業と結びつき、蚕の安全な飼育を祈ることが強調されたためであろうと想定されている。

・1 月 14 日に繭玉（米をひいた粉をねった団子や餅）をつくる。楢の木の枝に繭玉を刺す。繭玉の形は養蚕を営む家は繭形、稲作を営む家は丸形である。この枝を大黒柱や台所のオカマ様の柱に縛り付ける。ドンド焼きで繭玉や餅を焼いて食べると風邪をひかない、悪い病気にかからない、おできができないと言われた。

・七夕　七夕飾りの枝は江川に流す。幹は切って墓場の花挿しにした。

・本吉田八幡宮に繭の健康や豊かな繭の生産を願って繭で鳥居を象った絵馬、技術の上達を願って奉納した牡丹の刺繍額が奉納されている。仁良川の佐竹稲荷には、機織りの上達を願ったと思われる績の額が奉納されている。

・伝説と昔話　機織りの帰りに狐に化かされる話

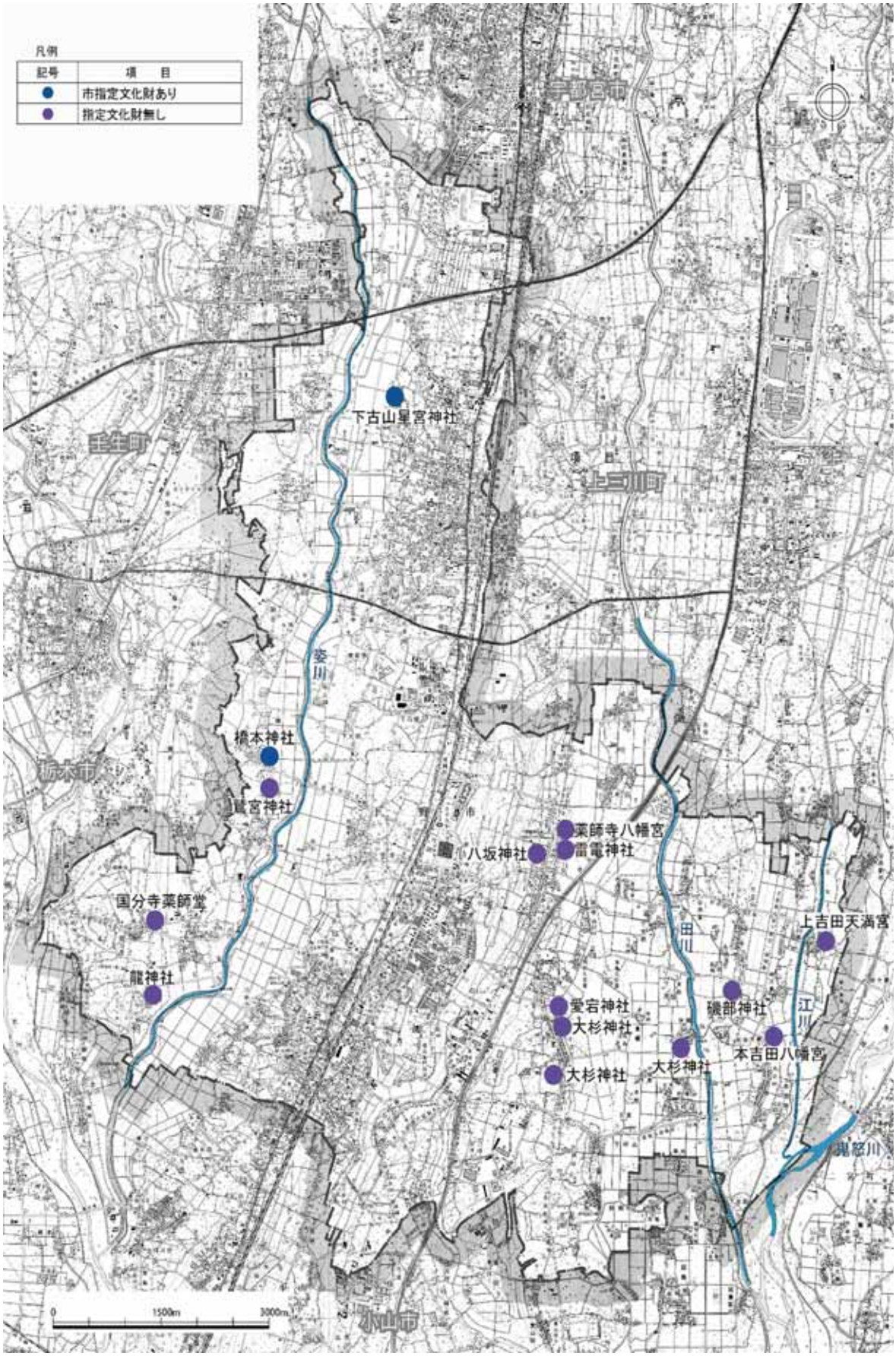

図 18　下野市の主な神社（祭り・民俗芸能）

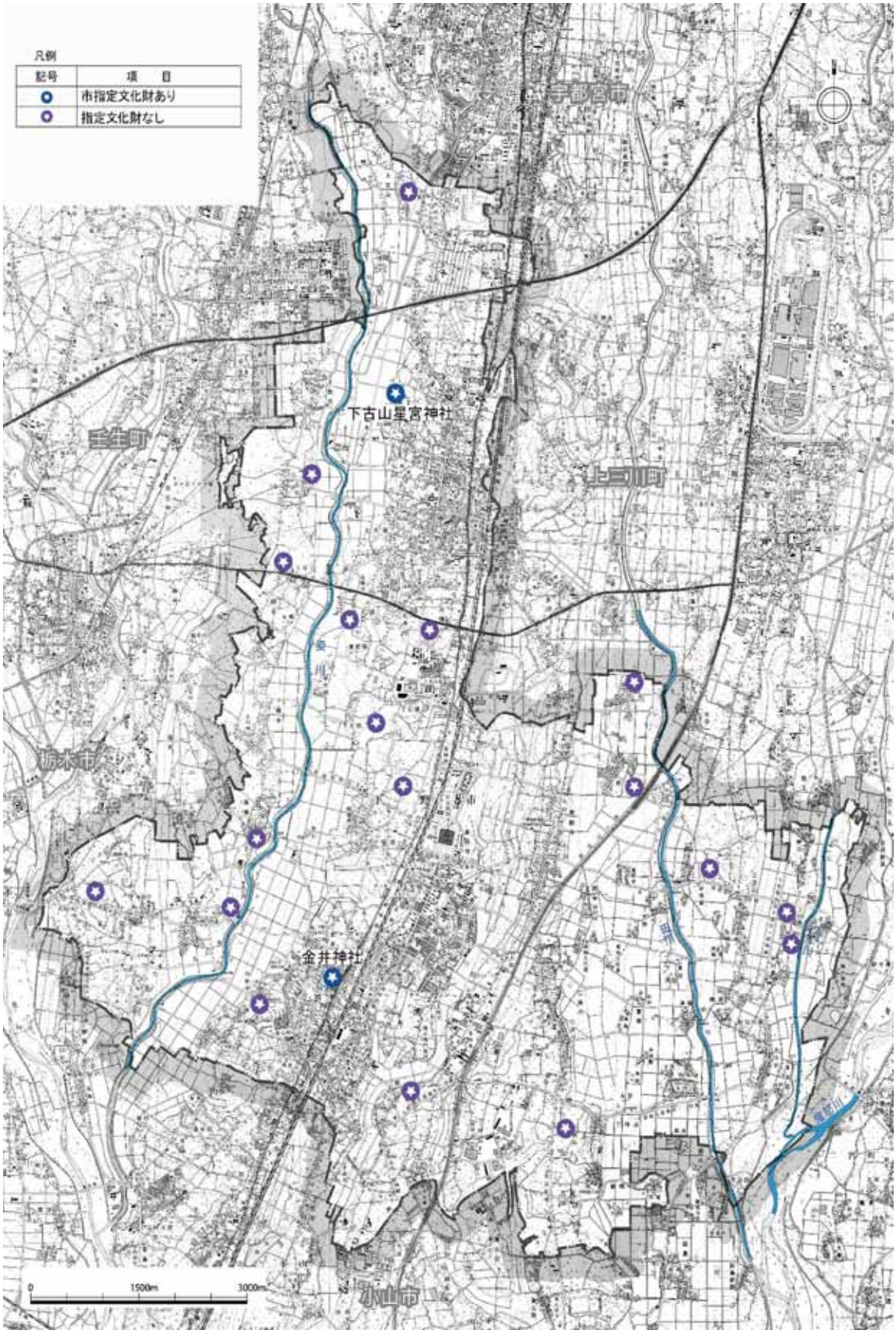

図 19　星宮信仰関連分布図（星宮信仰宗教対象物）

下野市域で行われていた講と関連石造物

種類	名　　称	性　格	関連石造物
性別・年齢別	庚申講	庚申信仰の講。戸主（男性）を中心とした。	庚申塔
	十九夜講	月齢十九日の月待信仰の講。主婦を中心とした。	十九夜塔 等
	念仏講	念仏信仰の講。主として主婦の座を嫁に譲り渡した女性を中心とした。	念仏供養塔
生業別	馬頭観音講	馬の守護神である馬頭観音を信仰する講。馬を飼育している家を中心とした。	馬頭観世音塔
	恵比寿講	七福神の一柱である恵比寿を信仰する講。商売を営む家を中心とした。	
	機神講	機織りの神である機神を信仰する講。機織りをしている家を中心とした。	
その他の信仰別の講	雷電講	群馬県邑楽郡板倉町の雷電神社を信仰する講。雹や落雷除けを願うもので、特に干瓢農家に信仰する家が多かった。	
	雨引観音講	茨城県雨引山の楽法寺の観音菩薩を信仰する講。安産・子育てに霊験があるとされ、十九夜講と習合している例もある。	
	愛宕講	火防の神である愛宕神社の信仰を中心とする講	
	弁天講	七福神の一柱である弁財天を信仰する講	
	大師講	弘法大師を信仰する講	弘法大師石像
	太子講	聖徳太子信仰の講	聖徳太子石像
	薬師講	薬師如来を信仰する講	
	不動尊講	不動明王を信仰する講	不動尊石像
	地蔵講	地蔵信仰の講	地蔵石像
	疱瘡神講	疱瘡除けを願って疱瘡神に祈る講	

石造阿弥陀庚申塔

十九夜講で建立された
石造如意輪観音坐像

主な講の内容

名　称	月・日	概　要	備　考
庚申講	庚申の日	60日ごとの庚申（カノエサル）の日の夜に、講の当番の家に集まり、足尾町（現日光市足尾町）の庚申山神社から受けてきた青面金剛の描かれた掛軸を床の間に掛けてお神酒、白飯、豆腐、線香等をあげて礼拝する。その後、お神酒を酌み交わし、料理を食べながら農作業や世間話をする。古くは一晩眠らずに起きていた。この講は各家の戸主を中心としたもので、男性の講であった。	・庚申の掛け軸をかけている間に「地震があるとやり直し」という俗信があり、礼拝が済むと早々に掛け軸を丸める風習があった。 ・60年に一度の庚申年にオンマルメ（御丸め）と称して、それまで使っていた膳椀等を、塚を築き地中に埋める風習もあった。この時に庚申塔を建立する例も多かった。
十九夜講	春秋2回等	各家の主婦だけをメンバーとする講。元来は月齢の19日に集まる女性の月待信仰であるが、多くは安産を祈願する祭りとなっている。地区により、細かい部分は異なるが、公民館等に主婦達が集まり、十九夜の本尊である如意観音菩薩の掛軸をかけ、御神酒や赤飯等を供えてお祈りした後、地区内の十九夜供養塔にお参りする。その後、当番が用意した御馳走を食べながら会食するという流れで講が行われる。	・妊婦のいる家では、祭壇にお供えしたローソクや燈明を貰っていき、陣痛が始まると枕元に点して安産を願う風習があった。 ・現在でも継続している数少ない講である。
念仏講	お産時および葬式	主婦の座を譲り渡した年配の女性を中心とした講で、お産のある家に講の人たちが呼ばれて安全祈願の念仏をした。また、葬式では死者を家の門口で見送る「門送り」を行い、葬式後に融通念仏、十三仏念仏などを唱えた。	・安産祈願では雨引山の掛軸を床の間に掛け礼拝した後、十九夜塔にお参りして、その後に家で念仏を唱えた。

主な共同行事（祭り・祈願）

名　称	月・日	概　要	備　考
八坂祭り（天王様）	7月中旬	八坂神社（天王様）の祭礼で、小金井、柴北、吉田、薬師寺、石橋等、市内各地で行われる。地域によって細部は異なるが、神社に安置されている神輿の「宮出し」神事を行いお仮屋に移した後、神輿が町内を回る「神輿渡御」を行い、夜遅く神社に神輿が戻る「宮入り」で祭りが終わるという流れは、ほぼ共通している。	・祭りに合わせて子どもたちが神輿を担ぐ子ども神輿を行う地区も多い。藁でつくった藁神輿を担ぐ地区もある。神輿を担ぎながら家を廻り、賽銭をもらい、集まった賽銭は、後に子どもたちに分配される。 ・祭り期間中に小麦饅頭をつくって神輿にお供えする風習もある。
天祭	地域により異なる	天念仏や天道念仏とも呼ばれ、太陽や月を祀り、五穀豊穣、風雨順調を祈願する祭り。昔は春3月と夏8月の2回行うところが多かったが、近年は年1回2月中旬頃に行う地域や8月20日頃に行う地域がある。天棚と呼ばれる祭壇や、神社の社殿の前に竹を四方に立て、そこに注連縄を張り、中央に幣束を付けた青竹を立てた区画に、洗米やお神酒を供え礼拝する。各家では赤飯を神前に供えた。また、集落の人々が集まって宴会等を行った。	・この祭りの時に、年番や地区の班長等が樋口や板倉の雷電神社に参詣して、御札を受けてきて、地区雷電神社や星宮神社に収める風習がある地域もあった。 ・町田の星宮神社に天棚の一部が残っている。旧吉田村の塚越でも祭りに使った日天・月天と呼ばれる祭具が残っている。
風祭り	9月初旬	台風の来襲が多い二百十日（立春から数えて210日目）に行われる嵐除けの祈願。仕事を休み、各地域で住民が神社の社務所や公民館に集まり、会食した。家々では小麦饅頭や赤飯をつくった。神社に嵐除けの参詣を行い、嵐除けの御幣を立てる地域が多かった。	・塚越の大杉神社では、世話人を先頭に、神輿の安置されているお宮の周りを「センドウモウス、センドウモウス」と唱えながら時計周りに3回まわるという風習があった。 ・小金井等では子ども相撲が行われた。

名　称	月・日	概　要	備　考
辻ぐり	彼岸入り日 5月中頃	悪魔や疫病が集落に入るのを防ぐための厄除け祈願の行事。地域によって行う日は異なる。集落内の十字路や三叉路、出入り口などで、念仏をあげて数珠回しを行う。念仏をあげるのは、多くの場合、女性の年寄りであった。辻札（護符）を竹に刺して、集落の入口や家の門口に立てた。辻ぐりが終わると、集落の人々が集まって、酒・肴で会食した。	辻札は国分寺地区の笹原では「猿田彦大神」と墨書した護符、南河内地区の台坪山では表に「急急除律令」裏に「厄病除」と書かれた護符を使った。
国分の符行	3月	国分甲地域で毎年３月に行われている行事。各組の年番が集落センターに集まって、大きな片方草鞋を作り、集落の境の何箇所に立てる。これを地元では符行といい、以前は草鞋に厄除けの梵字や「疫病除」と墨書した付け木を一緒に付けた。	真岡市道祖土や小山市武井等にも同様の行事がある。
国分薬師堂のカツクレ	2月13日頃	国分寺境内の薬師堂で毎年2月13日頃（元は旧暦正月13日）に行われる祭り。祭り当番が毎年交替で薬師堂の護摩壇に生の鰹一匹と、ネギ、干柿を供えて礼拝する。終わると公民館で直会が行われた。供え物の鰹は切り分けて家に持ち帰って食べた。	薬師堂前にさしかかった馬が倒れ難儀していたが、馬主や地元の人々が馬の助命を願って、馬の背にあった鰹などの品物を薬師様に供えたところ、馬は立ち直って役目を果たすことができたという伝承からこの祭りが生まれたと伝えられる。
ナベカケズ	11月15日	南河内の谷地賀で行われる行事。組内あるいは講中の特定の家が宿になり、そこで調理したものを組内または講中の人々が御馳走になる。宿以外の家は調理を行わない。これに先立って、御神酒や御幣、尾頭付きの魚等を組の氏神に供える祭典が行われた。	御馳走には共有田で収穫された作物が使われた。会食の前には、組の氏神に米や尾頭付きの生魚等を供え、御幣や注連縄を新しくした後に、お供えした生魚を焼き、それを肴に御神酒を飲んだ。

名　称	月・日	概　要	備　考
暁祭り	11 月 13 日	国分寺地区紫の氏神である龍神社の祭り。早朝に行うので暁（アカツキ）祭りと言われている。この祭りでは洗米や野菜等と共に海の幸である尾頭付きのサンマを五匹供え、神事が済むと注連縄や幣束などを燃やした残り火でサンマを焼き、直会の席で氏子達が一箸ずつ食べるという風習が伝わっている。	現在は早朝に行うが、以前はその前夜にヨイマチ（宵祭り）も行っていた。
大杉様祭り	2 月～ 4 月	大杉神社の祭り。大杉神社がある地区で行われた。大杉様の神輿を四人で担ぎ、年番が梵天（ボンデン）を持って、神輿とともに氏子の家を廻って悪魔祓いのお祓いをして歩き、お賽銭を貰った。神輿には囃子連がついて歩き、大杉囃子を演奏した。現在は安置された神輿に人々が参詣したり（国分）、お囃子のみ行われる（仁良川）ようになっている。	大杉神社は悪魔払いや水神として信仰され、本社が茨城県稲敷郡安波に鎮座していることからアンバ様と呼ばれる。
子ども相撲	7 月 24 日	金井神社境内で行われる。祭り前日に祭り当番町の神社総代や祭り当番によって、当年の小麦藁を使って土俵をつくる。土俵の四隅には笹竹を立てて注連縄を張り巡らす。祭り当日は土俵祭りの後に取り組みが行われ、勝負にかかわらず賞金（小遣い）が与えられる。終了後、大人達は公民館等で直会を行う。	・以前は金井神社の他にも国分の薬師堂等、各所の境内で行われていた。いずれの地区でも元は、若者や大人達も相撲を行った。 ・土俵祭りでは、土俵中央に砂盛した上に大幣束を立て、土俵南西隅に塩を入れた笊を置き、神官がお祓いした後に神社役員や当番が玉串を奉天する。

民俗芸能

名　称	月・日	概　要	備　考
太々神楽		太々神楽は栃木県下に最も多く分布している民俗芸能の一つで、「天の岩戸開き」を中心に、主として『古事記』や『日本書記』の内容をモチーフとしている。元々は神職中心の神楽であったが、神楽師と称する氏子の手に委ねられるようになったところも多い。市内では、橋本神社の春の大祭に奉納される太々神楽が市の無形文化財に指定されている。また、下古山星宮神社で元旦と春の大祭に神楽が奉納されている他、仁良川の愛宕神社や薬師寺八幡宮でも祭礼の時に神楽が奉納されている。	かつては本吉田の八幡宮でも太々神楽が奉納されていた。八幡宮には昭和 4 年に建立され神楽殿がある。
お囃子		栃木県内に分布する囃子は、大きく神楽囃子と祭り囃子に分けられる。神楽囃子は太々神楽の時などに演奏されるもので、祭り囃子は主に寺社等の祭礼の際に演奏されるものである。下野市内で地域の特色がみられるのは祭り囃子であり、神田囃子系統のものと大杉囃子系統のものがある。 神田囃子系統のお囃子は、八坂神社の祭礼（八坂祭り）の際に演奏されるもので、八坂祭りを行う地区に伝承されている。大杉囃子は大杉神社の祭礼の際に演奏され、仁良川地区に伝えられている。	お囃子を伝える組織として、栄町お囃子会、薬師寺お囃子会、柴北お囃子会、小金井囃子連等がある。

※　この他、わらでっぽうなどの行事がある。

２．下野市の歴史文化の特性

（１）重要遺産（史跡）が集積する古代文化

本市の歴史の中で最も豊かな文化財を残しているのは、古墳時代から飛鳥・奈良・平安時代までの古代である。古墳時代前期の小地域の首長墓と考えられる前方後方墳が三王山地区から宇都宮市茂原地区に分布している。また、古墳時代後期から終末期には下毛野国を統治した首長の墓とされる前方後円墳や円墳が思川や姿川流域に多数残されている。特に 6 世紀後半以降には複数の系統の首長が並立したが、武力衝突することなく、輪番制のような体制を整備し共存を図ったことが読み取れる。

当地域にこの時期に築造された首長墓は、墳丘１段目に広い基壇面を持ち、前方部に石室を配置し、凝灰岩切石を用いて横穴式石室を内部主体とするという独特な特徴を持つ。これらの古墳は近年の研究では「下野型古墳」と呼称され、研究の対象とされている。

畿内からは遅れるが、7 世紀になると前方後円墳の築造は行われなくなり、7 世紀中頃に一辺 53 メートルの大型方墳である多功大塚山古墳や多功南原１号墳の築造を最後に古墳はその姿を消す。最近の調査事例では、これとほぼ同じ時期に下野薬師寺の建立に先立つ豪族居館か官衙的な建物配置がなされた建物群が下野薬師寺の直前まで配置されており、その地を使用して下野薬師寺が建立されたことが判明している。

下野薬師寺の創建には 7 世紀にこの地方を治めた豪族である下毛野氏と深い関係があるとこれまで各研究者により指摘されている。この下毛野氏は、下毛野朝臣古麻呂という人物を輩出した。古麻呂は地方出身の身でありながら中央において天武天皇・持統天皇らに仕え、新たな国家形成を模索している中枢部の核となる人物である藤原不比等からの信任も厚かった。それらの信任と明晰な知識を見込まれ、大宝律令制定のための重要なメンバーとして活躍した。和銅２年（709）に式部卿大将軍正四位下の官位で古麻呂は死去する。

記録ではこの後、一族である下毛野川内朝臣石代や下毛野朝臣虫麻呂が中央で活躍しており、古麻呂を含めた彼らの功労と対東北政策により、下野薬師寺は 8 世紀前半に官営事業として再整備された。あわせて、天平宝字５年（761）には畿内の東大寺、九州の筑紫観世音寺とともに僧侶となるための受戒を受ける「戒壇」が設置され、東国における仏教施策の一翼を担う重要な寺院として位置づけられた。後の『続日本後紀』嘉祥元年（848）には、「体制巍々としてあたか七大寺の如し」と記されており、東国の仏教文化の中心的存在であった。

下野薬師寺の創建と前後する時期に律令体制が導入され、新たな国家経営が進められた。東国にも郡の役所である郡衙が配置される。現在の石橋駅周辺には、河内郡の役所であった郡衙と推定される上神主・茂原官衙遺跡や多功遺跡が点在しており、郡成立以前の「評」期の役所の可能性も指摘されている西下谷田遺跡などが調査により明らかにされている。また、栃木市の東端部で思川の右岸には下野国庁が配置されている。これらは、東山道の沿線に配置された律令期の公的施設であり、国－郡－里（郷）の支配体制を明示する史跡

となっている。これら行政的な施設のほかに、聖武天皇の命により、天平 13 年（741）に全国に国分寺と国分尼寺の配置に関する詔が発せられたことから、思川左岸の東山道沿線の台地上に下野国分寺・下野国分尼寺が建立された。

本市周辺は弥生時代後半から古墳時代前半、後期以降奈良平安時代にかけてこれらの地域首長層による巨大墳墓の築造や国家プロジェクトによる官衙・寺院の建設が次々と実施された地域であり、それらを支えた多くの庶民が当地で暮らしていたと考えられ、実際に発掘調査により、多数の集落跡が発見され、他地域と交流があったことを示す遺物なども多数出土している。このような遺跡の状況は本市一帯が東国有数の豊かな地であったことを物語っている。そこに花開いた古代文化は、本市の歴史文化を彩る重要な要素となっている。

（２）有力豪族の勢力圏の狭間で展開した中世文化

自治医大地区開発の際に発見された下古館遺跡の中央部からは、南北に伸びる道跡が発見された。この道跡は地元で「うしみち」と呼ばれていた道路の下から発掘され、その線形もうしみちとほぼ同じであった。これにより、小山と宇都宮を結ぶうしみちが中世から存在したことが推定された。古代道に続き中世でも本市域は交通拠点としての性格を保持したが、同時にこの地理的特性が小山を拠点とする小山氏と宇都宮を拠点とする宇都宮氏という有力豪族（武士団）の勢力圏の狭間で支配をめぐり、目まぐるしく変化する本市域の中世の歴史を創り出すこととなった。

鎌倉幕府成立の際、本市域は北関東で重要な地位にあった小山氏の勢力範囲となっており、その支族である薬師寺氏が奥州道の警護として薬師寺城を築城した。鎌倉中期以降は新たに勃興した宇都宮氏族系の支配、壬生氏の台頭、結城氏、下妻・下館系の支族の支配など情勢は激しく変化した。

こうした中で、児山城や箕輪城が築城された。また、城館以外にも先に挙げた下古館遺跡では、その性格について定説は確立されていないものの、多くの人々が集まり交流した「市庭」または宗教空間とみられる場所も形成されており、有力豪族の勢力圏の狭間で本市域に暮らした人々や本市域の武士団が、土地を守り交流や経済を発展させながら生き延びてきたことがうかがえる。

有力豪族の勢力圏と在地のあり方、中世の市場や宗教空間のあり方、交通路とこれらの関係等、本市域の中世文化は全国的に重要な歴史的課題を豊富に内包している。

（３）近世・近代の経済発展を支えた干瓢と結城紬

本市の歴史文化を語る上で欠かすことのできない特産品として干瓢が挙げられる。干瓢はゆうがおの実を細長くむいて乾燥させたもので、正徳 2 年（1712）に近江水口藩の藩主であった鳥居忠英が下野壬生藩に国替えになった際に、夕顔の種を取り寄せ栽培を奨励したと伝わっている。また、当地の気候が干瓢の元である夕顔の育成に適していたこともその要因の一つと考えられている。これらの歴史的な背景により、本市をはじめとする栃木県南部に干瓢の生産が広まったとされる。現在、栃木県は全国の干瓢生産の 97 パーセント

を占め、このうちの 52.9 パーセントが本市で生産されている。干瓢生産に使用された道具である手かんなや丸むき機は、本市の貴重な有形民俗文化財である。

また、ゆうがおの花が咲く畑や、細長く剥いたふくべの実を干す風景は、この地域の夏の風物詩となってきた。さらにゆうがおの作付けに必要な畑の肥料として、畑の周囲に点在するクリ・クヌギの雑木林の落ち葉を堆肥として使用しており、雑木林と干瓢生産は深い関連性があったことが判明している。

干瓢と並びこの地域の工芸品として名高いものに結城紬がある。結城紬は茨城県、栃木県で主に生産される絹織物で、栃木県では小山市から本市付近まで、茨城県では結城市周辺が主な生産地となっている。この地域は小山氏とその傍系である結城氏の支配範囲であるとされている。結城紬は江戸時代より最上級の紬としてその名が広く知られるようになり、明治 6 年（1873）にはウィーンの万国博覧会に出展された。昭和 31 年（1956）には国の重要文化財に指定され、さらに平成 22 年（2010）にユネスコ無形文化遺産として登録されている。市内では下野国分寺跡に近接する甲塚古墳で機を織っている状態を表現した機織形埴輪が出土したことから、当地は古代より織物が盛んな地域であり、それが中世結城氏の支配を経て江戸時代に結城紬となり、技術の改良と洗練により現在まで続いていることをうかがうことができる。

干瓢と結城紬は明治以後に生産がますます盛んになり、近代以降の本市域の経済を支えた。また、近世以降、講をはじめとした様々な交流行事や民間信仰、風習が培われる上で、大きな影響を与えたと考えられる。

（4）交流と祈りのかたち「講」と「祭り」

古代律令期には国家宗教を背景に下野薬師寺や下野国分寺が建立されたが、中世以降は子孫繁栄、極楽往生など庶民の幸福を願う民間信仰が広がり、近世以降に盛んになっていった。

こうした民間信仰を背景に近世以降、各種の「講」や共同体のハレの行事である「祭り」が本市域の各地区で盛大に行われるようになった。講や祭りでは、集まった人々がともに御馳走を食べる会食がつきものである。講の構成員はそうした会食に掛かる費用負担を賄えることが求められる。本市域で講が盛んであった背景には、干瓢と結城紬の生産により、農家に一定以上の現金収入が見込めたことや、交通要衝地としての宿場や沿道集落の安定的な営みがあったと考えらえる。

祭礼の拠点となった神社も、各村単位で祀られており、薬師寺八幡宮は貞観 17 年（875）に岩清水八幡宮の祭神を勧請したとされている。また、上吉田天満宮は弘安元年（1278）結城氏が北野天満宮から、本吉田八幡宮は文治 4 年（1188）に小山朝政が鎌倉鶴ヶ岡八幡宮から、磯部神社は延長年間（923～930）に結城氏がそれぞれ勧請したといわれている。この他、南河内地区には 79 の神社が所在することがわかっている。国分寺町史民俗編に採録されている神社は 8 社であるが、箕輪の鷲宮神社は旧石橋町橋本地区と 2 村の鎮守氏神として祀られてきた。寛治 5 年（1091）には、源義家が奥州追討の際に参拝したとされる。

小金井の金井神社は、境内に八坂神社、天満宮、雷電神社を祀っている。当初、この神

社は虚空蔵と呼ばれていたが、次に北辰社、その後星宮神社から金井神社と名称が変わっている。現在の古山地区にある星宮神社は、乾元元年（1302）に児山城の鎮守として勧進されたと記録にある。この星宮神社は、全国の中でも本市周辺に多く祀られている。合祀や現在所在不明の場合も含め、星宮神社または星宮信仰に関連する神社は、旧国分寺地区だけでも 8 社、石橋地区には 9 社、南河内地区には 6 社あるとみられる。当地域を中心にこの分布は限定的な地域を示しており、非常に特徴的な分布である。

こうした民間信仰やこれに基づく交流によって生み出された民俗文化は、現在では廃れてしまったものも数多い。しかし、八坂神社の祭礼やお囃子、太々神楽等の現在も継承されている民俗芸能や祭礼の中に、人々が守り伝えた文化のかたちが継承されている。

（５）下野市の歴史文化を貫く要素　交通とネットワーク

１）交　通

古代には東山道が、江戸時代以降は日光街道や関宿通多功道が通り、中世には鬼怒川右岸の舟運で栄えたと伝えられる等、本市の歴史文化の中で「交通」は常に大きな役割を果たしてきた。古代の幹線道路である東山道沿いには下野国分寺跡、下野国分尼寺跡、下野薬師寺跡をはじめ、下野国庁跡（栃木市）や多功遺跡（上三川町）や上神主・茂原官衙遺跡（宇都宮市・上三川町）等、古代下野の行政や仏教文化を担った重要遺跡が連なっている。また、同時代の宇都宮市以南から本市域にかけての遺跡からは、多数の新羅系土器や畿内産土師器等が出土しており、これらの官衙や寺院の建設のために、東山道を通って最新の技術を保持した渡来系氏族や畿内の技術者がこの地に来訪したことがうかがえる。江戸時代には日光街道の宿場町（小金井宿・石橋宿）を軸として繁栄し、徳川将軍の日光社参の際の休息所が設けられた。

明治時代になると、明治 18 年（1885）7 月に上野から宇都宮間の鉄道（東北本線）が開通し、石橋駅が開業した。その後、明治 26 年（1893）3 月には、小金井駅も開業となった。これを契機に江戸時代の宿場町は、首都東京と鉄道路線で結ばれた物流の要衝として発展していった。また、自動車の普及に伴い日光街道は、国道 4 号として整備され、物流の動脈として新たな発展を遂げていった。

以上のように、「交通」は、古代から現在に至るまで下野市の歴史文化を貫く要素となっている。

２）ネットワーク

本市の歴史文化は近隣自治体を含む地域一帯の広がりの中で、その本質的な特色を捉えることができる。栃木県南域における古墳時代の首長墓の消長・変遷は、田川流域、姿川流域で展開された。現在の行政区域では下野市、小山市、壬生町、栃木市、上三川町、宇都宮市南部にまたがる地域である。

飛鳥・奈良・平安時代には東山道の推定ルート上に、国府、官衙、寺院（下野薬師寺、下野国分寺、下野国分尼寺）が設置・建立された。本市域の下野国分寺、下野国分尼寺は栃木市の下野国庁と一体となって、古代下野国の中心を構成していた。また、下野薬師寺

跡の近隣には、豪族の居宅等の特殊な集落と考えられる多功南原遺跡（上三川町）があり、東山道沿いに北へ向かうと官衙である多功遺跡（上三川町）や上神主・茂原官衙遺跡(宇都宮市・上三川町)が存在する。これら官衙、寺院は相互に密接に関連していたことが考えられる。

また、宇都宮市の水道山瓦窯跡では、下野薬師寺、下野国分寺、下野国分尼寺、上神主・茂原官衙に供給された瓦を、小山市の乙女不動原瓦窯跡では下野薬師寺に供給された瓦をそれぞれ焼成したことが調査により確認されている。さらに、隣接する常陸国（茨城県）の新治廃寺跡、結城廃寺跡（結城市）からは、下野薬師寺系に属する瓦が数多く出土しており、寺院や官衙の造営に関するネットワークが国を超えて存在していたことをうかがわせる。

中世には、この文化圏が小山氏、宇都宮氏の支配域となり、その境界として本市域に児山城、薬師寺城、箕輪城等の城館が設置された。この範囲が、結城紬の生産地と重なることも興味深い。結城紬は中世に小山氏とその傍系である結城氏が支配した地域で、発展したものであるが、中世の小山氏、宇都宮氏等の支配域が古代以来の文化圏につながるものであることをうかがわせる。

近世以降も交通拠点として発達した本市の歴史文化は、日光街道や東北本線等の交通路で結ばれた地域とのネットワークに密接に関連している。その基盤となるのは、古代以来の文化圏であり、その中に本市の文化財も位置づけられる。

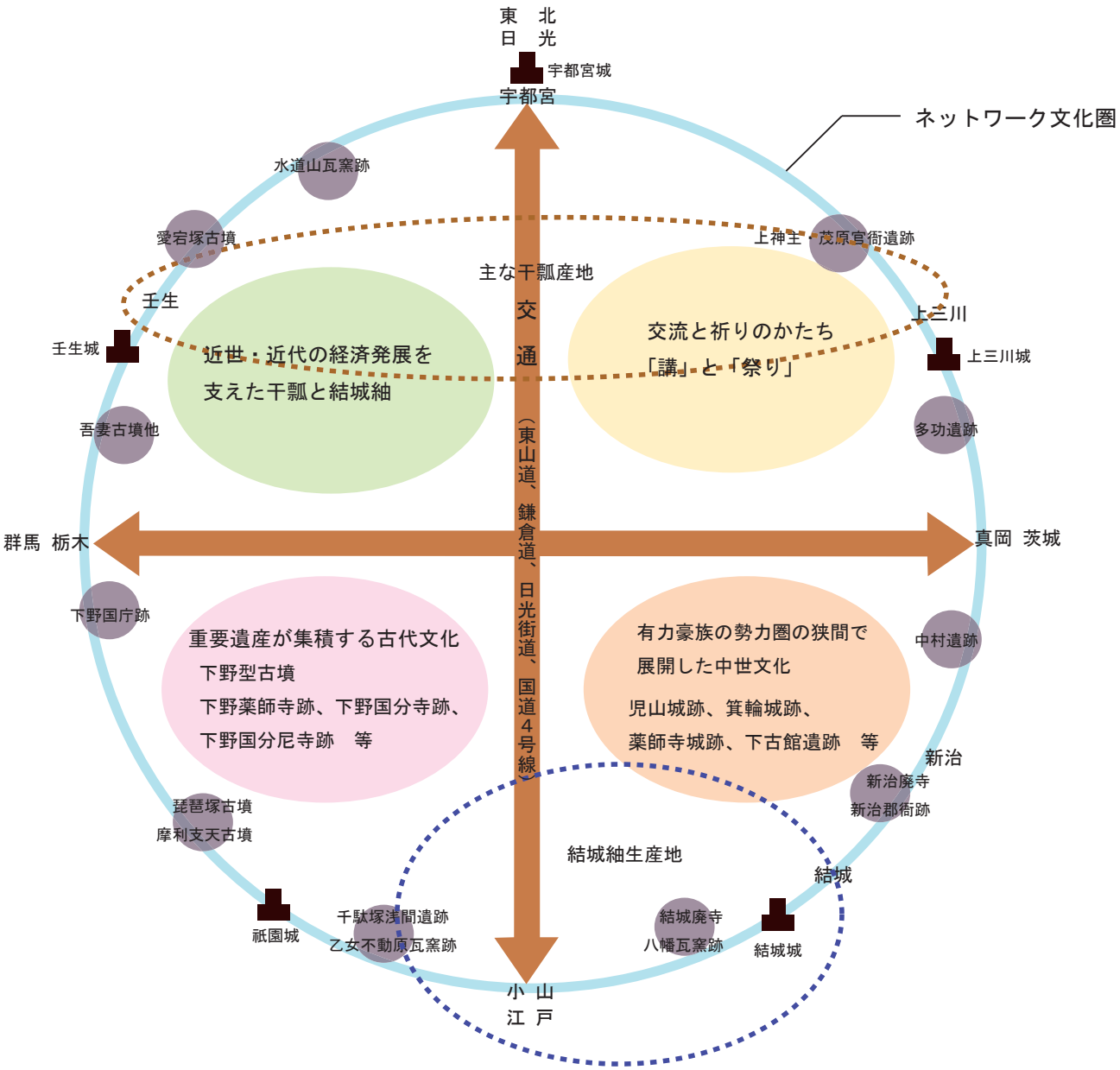

図 20　下野市の歴史文化の特性概念